

---

# 父の遺志を継ぐ少年

楽しんでます

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

父の遺志を継ぐ少年

### 【Nコード】

N7299W

### 【作者名】

楽しんでます

### 【あらすじ】

父との約束を守り、一人旅を続けるアルフレッド旅の途中一人の少女に出会う、この出会いが彼と彼女の運命を大きく変える。

タイトル表示にミスがありました。

申し訳ございませんでした。

## プロフィール(前書き)

キャラ紹介です

ストーリーは少しずつ更新します。

## プロフィール

アルフレッド・ファルケン

姿（アレフ・H・ワトソン、デジタルホームズを参考）

年齢：18歳

性別：男

種族：半魔人

髪の色：金髪

瞳：紫

口調：僕

性格：ぶっきらぼうで人付き合いが悪いが、根は優しい。

武器：形見の剣

魔法：闇系

キャラ詳細

とある目的を持って旅をする少年、父に剣術を教えて貰っていたので、腕には自信がある。

リディア・ファルゼス

容姿（デジタルホームズの、アイリーン・ハドソンを参考）

年齢：16歳

髪の色：赤毛

瞳：紫

種族：魔人

口調：ボク

性格：ボク子でドジな面がある元気な娘、アルフレッドに気がある。

武器

アサルト・ライフル

（SCAR・SSRモデルガン専門誌を参考）

魔力で剣を造る。

キャラ特徴

リーザとはパートナーの少女、生まれてすぐ母親のイリアの力を自

身の中に取り込む…その事が彼女に無理をさせる原因になっている。

リーザ・ヴァルゼラート

容姿（聖剣 説3のリース）

年齢：16歳

髪の色：金髪

瞳：緑

口調：私

性格

母親譲りの真面目な娘

武装

バイアネット

（シューティング・スター・ライフタイプ）

魔法

回復系

キャラ特徴

自由聖騎士団に入ったばかりの新人、リデエアとは中の良い友人、二人揃って事件に巻き込まれる。

## プロフィール（後書き）

執筆頑張っ て行きます。

## 空中海賊の襲撃（前書き）

このストーリーは大聖堂騎士の続編で出す予定でした。

早く書きたいと思って外伝みたいにしようかと思いましたが、人物の役割を変えて執筆しています。

## 空中海賊の襲撃

アルフレッドSide

僕は今ある人物に会うために、飛行貨客船「クイーン・エレネ」に乗っていた……その人は父の好敵手だった……いつもその人の話になると、穏やかで誇らしげな父の姿に僕は憧れていた。

その時船体が激しく揺れるっ何かが起きてる！

「よく判らないけど、絶対ろくでもない事だけは言えるな……」

形見の剣を手に取り、外の様子を伺い一気に飛び出る、目の前に二人の女の子の姿が映る。

「君達は……海賊か？」

「貴方こそ、海賊かも知れないじゃない！」

たっく……問答何かやってる時間は無いのに……

「僕の名前は……アルフレッド・ファルケンだ、君達の名前は？」

「自由聖騎士団のリディアよ。」

「リーザです。」

また激しい振動が襲う、リディアと言う女の子がよろめき倒れそうになる 見知らない女の子を、抱きしめるのは抵抗感があるが怪我

をするのを黙って見てれない。

「きゃ…………えっ／＼。」

「脚を踏ん張っていないから、怪我をしそうになるんだ。」

全く……………何で僕が見知らない女の子の面倒を見なくちゃいけないんだ？

奥の通路から海賊らしき連中が現れる、リーザが拳銃で海賊達を撃ち抜く、海賊達はその場に倒れ込む。

「リデエア行くわよ！」

彼女を放して距離をとる自由聖騎士団……………父さんが話してくれた、騎士団の名前だな。

「え、ええ。」

「君達を見ていたら、危なかつしいから僕も行くよ。」

二人に睨まれるがそんな事知った事か、取りあえず僕が、しんがりをして 通路を進む、途中海賊が襲って来たが、返り討ちにした。

「ちょっと、貴方まで付いて来る必要は無いんじゃない？」

「五月蠅い！」

思わず怒鳴り付けてしまった、これ以上彼女達の仕事の邪魔をしない方がいいだろう……………彼女達も仕事の依頼は、要人の護衛かそれと

も別の何かだな。

そう思うと駆け出す、とにかく海賊の頭を潰して連中を騎士団に突き出そう。

飛行貨客船クイーン・ヘレネ、ホール

ソフィアSide

さて……ありったけのお宝は頂いたし、そろそろ引き時だね。

その時だあの子供達が来たのはこれが、アタシ等とあいつ等の長い付き合いの始まりだった……

「自由聖騎士団ですつ、動かないで下さい！」

威勢の良いお嬢ちゃんが来たね……少し礼儀を教えるとするかい？

「構わない、やりなっ！」

部下達に発砲命令をする、ホールの柱に隠れるのがやっとか……

リディアSide

先走ってリーザと逸れてしかも海賊の連中のご真ん中に出るなんて

……最悪……

「リーザ……ゴメンドジった。」

《私が行くまで、絶対に堪えて！》

堪えて……ほとんどボクの自業自得何だけどね……

諦めかけていたその時、二階のバルコニーからアルフレッドと言つ男の子が飛び降りて来た！

\*\*\*

アルフレッドSide

「なんだ？小僧。」

「俺達とやる気か？」

海賊達が身構える全く……子供相手にこの程度か……さて潰すか。

「……お前達に名乗る名前は無い……」

流石に古すぎるか……？

「「ふざけるな！」「」

一斉に僕に向かって来る剣を逆刃にして適当にあしらう……全く雑

魚だな……どうせなら、イリアさんと勝負がしたかった。

「お前は……そうかい、アイツの息子か？」

「邪道に堕ちた奴に話す舌は無い……」

小さな衝撃が船を揺らすどうやら騎士団の増援が来たみたいだ……

「潮時か……仕方が無い皆退くよ！」

「了解です姐さん！！」

海賊達が引き上げる。

リデエアとリーザは……青い髪の半獣人の男の人に怒られていた。

「申し訳ありません、フェリオ隊長……」

「ゴメンなさい隊長……」

「いいかい、チームワークが大事だとあれほどいつてるじゃないか  
！」

説教が長くなりそうなので助け出せる事にした。

「偉そうな事言うけど、そんな新米ルキに何を来たいしたんだい？アン  
タは。」

「君は？」

射殺す様な目線で僕を睨み据える、この人こそ騎士団の【蒼い魔弾】  
又は【蒼い獣王】の二つ名で恐れられた、騎士団のエースだ。

僕は彼がどれだけ強いか知っている……視線に負けない用に睨みつけ、名前を名乗る。

「僕はアルフレッド・ファルケンです、フェリオさん。」

これが彼との最初の出会いだった……

## 空中海賊の襲撃（後書き）

次回頑張って書きます。

一部表示を修正しました。

誤字を修正しました。

## イリアとの邂逅（前書き）

イリアと会う事になったアルフレッド……ひよんなことから彼女の  
家で暮らす事になるとは……今回少しギャグになりました。

描写を少し変更しました。

## イリアとの邂逅

この数日間は大変だった……フェリオさんの尋問は穏やかだったけど、容赦が無かった……

「まあ……当然だな、大体40回の勝負で決着の付かなかった相手の【息子】だからな……」

その時リデアとリーザの二人にあった……まあ挨拶位はきちんとするか……

「君はアルフレッド君？」

「ああ……そうだ……」

やっぱり駄目だ……魔人としてのプライドが邪魔をする……

「リデア……」

うん、リーザの気持ちも良く解る……誰だって、こんな無愛想な奴より話しやすい奴の方がいいに決まっている。

「うん……わかってる／＼。」

何でそこで、赤く為るんだ……僕は訳がわからなく為った……

「ねえ、アルフレッド君……ご飯食べに行かない？」

「はい？」

思わず頭が真っ白になった……君達……僕とのファーストコンタクト覚える？

「リデエアの手料理は美味しいんだよ」

リーザ君もか？でも不満そうな目だな……リーザ君は友達想いの良い娘だよ。

「て……はこれから有る人の所にて、うあああつ。」

無理矢理連れて行かれる……周りの視線が……特に男達の視線が鋭い……。

(まあ、絡まれたら返り討ちにしてやる……)

て、何処に行くんだ？っぐいぐい引っ張られて着いた先は彼女の自宅だった……

呼び鈴をリデエアが鳴らす中から、女の人が出て来る。

「はい、今行きまーす。」

しばらくしてリデエアのお母さんらしい女性が出て来る

「お母さんただいま、彼が前に話したアルフレッド君だよ」

「はじめまして、アルフレッドと言います。」

「はじめまして、私がリデエアの母のイリア・ファルゼスです、宜

しくねアルフレッド君。」

そのまま家の奥の食堂に通される……何か砕けた感じだな……そうこうしている内に料理が運ばれて来る。

「って……リデエア君どう見てもかなりの量だよ……これ。」

「だって 最初からアルフレッド君を呼ぶつもりだったの。」

無邪気な顔をして侮れん……所でイリア・ファルゼス？……そうかこの人が、父さんの言っていたイリアさんか……なるほどリデエアとよく似ている。

料理はリデエアとイリアさんの手料理だった、母さんも手料理が上手かったのだろうか？余り母さんの事を父さんは話したがらなかった。

食事も終わりリデエアとリーザが食器の片付けをしている……今此処にいるのはイリアさんと僕だけだ。

「ところで、アルフレッド君のお父さんアルゼリアスさんの事で貴方は此処に来た……そうでしょ？」

「はいイリアさん……父さんの事をイリアさんに告げる為に此処に来ました……」

おもむろにイリアさんが本題を切り出す……ボクは父さんの最期をイリアさんに話す……

「父さんはイリアさんに『ボクの事を頼む、そして我がよき好敵手

に出会えた事に感謝する』と言っていました……」

父さんはイリアさんにボクの事を頼むと言っていたが……父さんには悪いけど、僕はこのまま一人旅を試してみたい見知らずの女性の所で厄介になるなんて……

「分かりました、アルフレッド君の事は私が後継人になります。」

とんでもない事を彼女は口にする……だいたいあのフェリオさんが許す筈が無い……理由はリデエアの義理のお兄さんだ、僕だって素性の分からない男を家に住わせるのはどうかと……

「大丈夫 貴方はフェリオと同じ部屋に居て貰うから」

「フェリオさんと同じ部屋ですか!？」

いきなり大声を上げてしまった、イリアさんにリデエアとリーザが奥のキッチンから出てくる……

「えっ、フェリオ兄さんとアルフレッド君が相部屋!」

ちよつとりデエアさん……

「アルフレッドさん、フェリオさんと仲良くして下さい。」

リーザ!君までもか!更に悪い事は続く……フェリオさんが、イリアさんの家に帰って来た……厄日だな……今日は。

「なんだ……君も来ていたのか?」

嗚呼今は貴方が救世主に見えますフェリオさん……僕は今までのいきさつをフェリオさんに説明する。

「なるほど……姉さん達の悪い癖が出て君が困ってる訳だ。」

フェリオさん！何ヒールフェイスやってるんですかつ、貴方とは取り調べのときちぎちぎの険悪ムードでしたよっ。

「フツ……アルフレッド君諦める……姉さん達の決定は変わらないよ」

「……て、おかしいですよ！フェリオさん!!」

勝ち誇った顔のフェリオさん、その時イリアさんが助け船を出してくれた。

「じゃあこうしましよ、アルフレッド君と私が練習試合をして、アルフレッド君が勝ったらアルフレッド君の意志を尊重しますでも負けたら……」

「負けたら……イリアさん達の提案を受け入れる……ですね?」

頷くイリアさん達味方はいない……孤立無援か……

(死亡フラグがたったな……)

場所を近くの修練場に移す……イリアさんとこんな事で戦う事になるとは……

修練場に着いた修練場内は広いな……これならやれる。

「さあ、アルフレッド君覚悟はいい？」

イリアさん……何ヒールフェイスで僕を見るんですか？

「ええ……依存はありません本気で行きます。」

訓練用の剣を構え互いに間合いを取る……悪くない緊張感だ……よし僕から仕掛けるっ。

互いの剣がぶつかり合う、流石はイリアさんだ、父さんの言っていた通りの剣士だ、そして僕は自身の出せる渾身の一撃をイリアさんに打ち出す。

しかし、あっさりとかわされた……イリアさんの剣が脇腹に入る……僕の負けだな……勝負の理由は馬鹿らしかったが、イリアさんの強さが分かったただけでも、良しとしよう。

「ふう、危なかった……」

「お母さん大丈夫？」

「アルフレッド君残念だったね。」

女性陣は賑やかに言っているが……フェリオさんは機嫌が悪そうだ僕のせいかな？

「姉さんも無茶をまたして……以前の力は……」

「？」

どういふ事が聞きたかつがこの時はフェリオさんが、恐い雰囲気だったので聞けず仕舞いだった、互いに礼をして修練場を後にする。

こうしてイリアさん達と暮らす事になった。

翌日とんでもない事を父さんがイリアさんに、頼んでいたのを初めて知る事になった。

## イリアとの邂逅（後書き）

次回頑張ります。

誤字を修正しました。

修正が遅れて大変申し訳ありませんでした。

自由騎士団に強制入団！？（前書き）

アルフレッドが自由騎士団に入団します。

これから彼の騎士団生活が始まります。

## 自由騎士団に強制入団！？

アルフレッドSide

フェリオさんとリデエアに起こされた……今は朝の6時だよな……  
まだ寝てても良いよな？

「さあ朝のトレーニングのマラソンから始めるぞ。」

フェリオさん……何故ヒールフェイス何ですか？

「おはよーっ、アルフレッド君」

リデエア……君が元気なのはお母さんの影響か？

まあ、ドアを開けて入って来るよりマシか。

「着替えるから待ってくれ。」

急いで着替える……ていつの間にかジャージが用意されていた、しかもサイズまでピッタリだな。

着替えてランニングをこなす……かれこれ1時間は走った、朝ごはんをご馳走になって自由聖騎士団本部に向かう。

イリアさんの姿は家に無かった、フェリオさんとリデエアに聞いたら、仕事が早いそうだ。

(どんな仕事をしているのだろうか……)

「アルフレッド君行くぞ。」

「フェリオさん、何処に行くんですか？」

「連隊長執務室だ。」

執務室に着いた……ドアをノックすると部屋の中から聞き覚えのある声がする……

「どうぞ、扉は開いてますよ。」

「しつれ……て、イリアさん……なんで……」

「……アルフレッド君？て……姉さん……真剣は修練場で振るって下さい。」

確かに真剣で素振りの構えだ……執務室が広くなければ何かしらの調度品が壊れたはずだ。

「え〜とこれは……」

「「ね・え・さ・ん！あれだけ真剣は手入れだけにしてって何度言えば分かってくれるの？体だって本調子じゃあ無いんだよ！」」

フェリオさんの怒声に耳がキーンとなった……フェリオさん……小魚食べてカルシウム不足補って下さい……

小1時間フェリオさんのお説教は続いた……そろそろ僕が呼ばれた

理由を教<sup>わけ</sup>えて欲しい……

「フェリオ……アルフレッド君の事……話していい？」

「ゴホンゴホン……そうだねアルフレッド君……僕は一旦失礼するよ。」

ふえ、フェリオさん……かむばつくつく、僕の願いも虚しくフェリオさんは去って行った……

コホン……さて冗談はこれ位にしてイリアさんの本当の目的と父さんが、彼女に会いに行けと言った理由を教えて貰おう。

「まず君の事は、君のお父様、アルゼリアスさんから手紙を貰いました。」

「父からですか？」

イリアさんから手紙を受け取る、書かれていた内容に僕は戸惑う。

手紙

アルフレッド、これを読んでもと言う事は私はこの世に居ないと言う事だ、さて……厭な話は私はしない主義だ、お前もその事は良く知ってるな？

(厭な話？父さんはそんな話は絶対に、僕の前ではしないじゃないか……)

実は家はお前がイリアさんに会いに旅に出たら、そのほかの財産とまとめて処分するように決まっている。

(……！……！)

母さんは人間族の出身でお前には母さんの血が受け継がれている、その事でお前の安全を考え旧交のあった、イリアさんに、お前を預ける事に私の独断で決めた。

(母さんの事はそんな理由だったのか……)

母さんの事はお前にも教えていない、何より母さんもその事を望んでいない、風の噂では彼女は病で亡くなったと聞いた。

(……！……！何故会いに行かなかったんだよつ。)

今のお前の気持ちも分かる何故なら私も病でいつ死んでもおかしく無いからだ……最後に一族の者達には、お前は永久追放にしたと告げている……これからは自由に生きる。

(……)

自慢の息子アルフレッドへ〜父アルゼリアスより〜

手紙をくしゃくしゃににぎりしめる……イリアさんの前だが顔を上げずに泣く……

「アルフレッド君……」

「僕は人間の混血だからって……そんな事父さんがっ、つまらない偏見に捕われるなって、何時も言ってるじゃないか！」

「待ちなさい！アルフレッド君！」

そのまま執務室からとび出した、何処をどうたどったのか覚えていない……気がつけば屋上に居た。

「まいったな……これで……一人ぼっちか……」

夕日を見つめ、ぼつりと眩く……

その時誰かが屋上に飛び出して来た。

「アルフレッド君っ、死んじゃダメだよっ。」

リデエアが抱き着く用に僕を突き飛ばす。

「な、何をするんだっ、リデエア。」

「だ、だって……これ……」

リデエアがあの手紙を泣き声で僕に見せる……

そうか、何処かに落としたんだ……逸れを彼女に見られた。

「あは、あはははっ。」

「何がそんなに可笑しいのよっ。」

顔を赤らめて怒る仕種が可愛いらしかった……

「大丈夫だよ……」

「本当に？」

取りあえず謝って置いた、僕の今後は自分で決める……まずは迷惑をかけた皆に謝ろう、逸れから自分の事は自分で決めると言ってる！

執務室

「アルフレッド君、残念だが君のお父さんから、宜しくと頼まれている。」

フェリオさん……どういふ事ですか？

その疑問にイリアさんが満足げにある書類を……ジャジャーンと広げる。

「なななっ、何だこれはーっ！」

書類には父アルゼリアスの直筆で、僕の名前が印されていた……

自由騎士団入団書

以下の者を見習い騎士に任ずる

アルフレッド・ファルケン

拒否権は無かった……なぜなら、イリアさんが後見人で僕は未成年だからだ……

（はぁ……早く成人になりたい。）

こうして父アルゼリアスの陰謀？により自由騎士団に入る事になった。

自由騎士団に強制入団！？（後書き）

次回ストーリーを長くする様に頑張ります。

## プロフィール2（前書き）

新キャラを考えてみました。

頑張つて新キャラを考えていきます。

誤字を修正しました。

キャラ設定を修正しました。

## プロフィール2

エクリア・トラスト

外見：八神はやて

種族：鬼と半獣人のハーフ（母エレノアの血が濃く出ている）

年齢：16歳

髪型：赤いショートボブ

瞳：緑

口調：関西弁

性格

穏やかだが母親似で喧嘩っ早い。

趣味

読書・釣り・昼寝

好きな物

りんご

嫌いな物

ニンジン

角触る奴

キャラ紹介

ガレスとエレノアの娘母親と良く似ている、弟は父親似、賑やかな人。

マコト・トラスト

外見：小狼

種族：鬼と半獣人のハーフ（父ガレスの血が濃く出ている）

年齢：15歳

口調：俺

性格

真面目趣味

スクープ探し・ゲーム

好きな物

噂の真偽を確かめる事

嫌いな物

ガセネタ

姉の巻き添え

キャラ紹介

ガレスとエレノアの子供騎士団内のトラブルメーカーに成りつつある。

アイリス

外見：銀色のホロ（魔獣化：銀色のフェリオ）

年齢：26歳位

髪型：銀色のストレートロング

瞳：緑

口調：私

性格

普段は穏やか、でも怒ると怖い。

趣味

魔術・骨董品集め

好きな物

毛繕い

嫌いな物

フェリオにちよかい出す奴

キャラ紹介

自由騎士団の教導官でかなり教え方は厳しい。

フェリオをたしなめる事が出来る唯一の女性。

## プロフィール2（後書き）

次回頑張ります。

## アイリス教導官（前書き）

フェリオの彼女のアイリスの登場です。

## アイリス教導官

イリア邸へアルフレッド&amp;フェリオの部屋へ

アルフレッドSide

ジリジリと目覚まし時計鳴り響く……ああっ！五月蠅いっつ、僕は低血圧何だよっ、朝に物凄く弱いんだよっ、だから静かにねたいんだよっ！！

布団を頭に深く被る……今日は訓練や勉強や早朝マラソンは無い……仮に有っても絶対に起きないっ。

「アルフレッド君、朝だぞ……布団で芋虫をしてるとは……起きるっ。」

フェリオさんが僕を起こしに来る、だが僕は眠いから絶対に起きないっ。

勢いよく布団を剥ぎ取るフェリオさん……同い年なら今頃『君表出な！』だね……

でも相手は自由騎士団屈指の魔獣騎士だ……フッ……今の僕が本気でも勝てないな……起きるか、眠いけど……

「さあ、マラソンだったアルフレッド君へ」

「やたらに……嬉しいそうですね……フェリオさん。」

何時も早朝マラソンの後食事をして、訓練所に向かう……今日はフエリオさんの恋人のアイリス教導官が僕の対戦者だ。

入口にそれらしい人が立っていた、銀色の長い髪と狐の尻尾に耳がトレードマークだ、彼女と目が合う。

「フェリオ、そしてアルフレッド君二人とも遅いよ。」

腰に手を当てお叱りモード全開のアイリス教導官ちらつとフェリオさんを見ると、緊張している。

「アイリス……ごめん業とじゃあ……」

「シャラップ！」（黙りなさい）

思わずビクツとなる、声の勢いなら、フェリオさんよりも迫力がある。

「フェリオ君は、カルシウム不足ね……小魚や骨付き鶏肉を沢山食べなさい！」

「いや……毎日牛乳や魚はちゃんと食べてるぞ……」

「ぶっ、……」

笑いかけて、アイリスさんの鋭い視線に気づき、慌てて姿勢を直す。

「アルフレッド君も人の事は笑えませんか。」

「は、はいっ！」

まるでどっかの暗殺者みたいな目付きに、思わず身が硬くなる……  
全く隙が無い……

「じゃあ、トレーニングを始めましょ」

修練場に案内された、前回とは違い、今回は広い場所だ、アイリスさんはフェリオさんが銀色の魔獣になった感じだ、フェリオさんも既に魔獣になっている。

二人の気配が消える……僕も自分の気配を押し殺す……耳を澄まし全神経を集中させる。

不意に殺気を感じその場を飛びのく、フェリオさんが遮蔽物の真上から飛び降りて来た。

「ッ……危なかった。」

「やるな、アルフレッド」

激しい攻撃を互いに打ち出す、突然凄まじい魔力を感じ取りその場を転がるように逃げる。

<へへえ、やるわねアルフレッド君>

魔弾で500メートル離れた所から、文字通り【狙撃】して来たアイリスさん。

「二人して、大人気ないですよ。」

「姉さんの変わりさ……」

「フェリオ！」

「？」

アイリスさんがフェリオさんを咎める、しかしフェリオさんは構わず話を続ける。

「姉さんは、君のお父さんとの戦いで、力を失ったんだ……もう昔みたいに戦えない……」

「！？」

それでイリアさんにあんなに叱っていたのか……

なら何故イリアさんは無理をするのだろうか？

「その後しばらくしてから、リデエアが産まれた……その時に姉さんの【力】をリデエアが吸収したんだ……」

「……」

「フェリオ……」

重々しい空気がその場を支配する……僕は何も言えないまま、修練場を後にした……

フェリオSide

「リデエアちゃんの事で……」

「八つ当たりかい？違うよ……アルフレッド君が、がっかりすから、話しただけさ……」

そう、アルフレッドの瞳は、かつて僕が姉さんに抱いた憧れの眼差しだ、アルゼリスさんが彼に聞かせたんだろ……ライバルがどれ程強かったかのかそして、その勝負がどれほど愉しかったかを……両親のいない僕には羨ましい限りだ。

アルフレッドSide

リデエア……全くどうかしてる！余りの苛立ちで壁を叩き殴る。

「……だからって」

「五月蠅い！」

「ひっ」

何か騒がしいな、取り敢えず行ってみるか……場合によっては悪いけど喧嘩が出来そうだな。

「たつく……リデエアとリーザか……アテが外れたな……」

「アルフレッド君!」

「アテがハズレてどういう意味?」

控えめに尋ねるリデエアと僕まで警戒するリーザ、彼女達を囲んで居るのは……雑魚だな……

「何だよお前!」

リーダー格がキャンキャン吠える……さて、どう片付けようか。

「余り人気の無い場所で、少し話そうか?」

「アルフレッド君!」

「親の七光りは黙ってる!」

「ひっ……っ」

リデエアから何時もの元気な勢いが無い……もしかしたら……コイツ等か原因は?

「場所変えよ 君達」

満面の笑顔でグループのリーダー格に話し掛ける。

「喧嘩は止めなさい、二人とも!」

その時、第三者の音が通路に響き渡る。

「リーザちゃんの言う通りやで、さっさと散らんかい！」

現れたのは赤毛の女の子と男の子多分兄弟だな、弟がリデエアとリーザを下がらせる。

「その君、名前は？あつ、うちはエクリアや」

「アルフレッドだ、好きな様に呼べ。」

無論下がるつもりは全くこれっぽっちも無い、こんな連中にリデエアをやる訳に行かない。

(リデエアがイリアさんの力を制御出来るとは思えない……)

なら僕が制御の仕方を教えるまでさ、その後で彼女と戦うのも悪く無いな。

「行くぞ……ついて来い。」

リーダー格と僕は踵を返してある場所に向かう、ついて来るのはエクリアとリーザに弟にリデエアまで……君達後で言い訳考えてる……？

施設の裏

アルフレッドSide

さて人数は……10人か、途中で何人かついて来たんだ……中には初日にガンくれた奴も居る。

「さて、始めよか？」

「リーダー格は僕が倒してしまっても構わないよね」

あまり敵を増やしたく無かったので、エクリアと共闘する事にした。

「行くぞお前等っ」

「オーーツ!!!」

元気なのは良いんだけどまずは実力を底上げて来なよ……

二人で軽くあしらう、エクリアは体術が得意みたいだ、特に蹴り技のキレが凄い、こちらも負けてられないサマーソルトキックを繰り出し、着地した後相手をかかわして、足払いに肘打ち等だ。

しかし楽しい(?)喧嘩祭も永くは続か無かった。

「誰が、こんな所で喧嘩祭しろって、言ったんや!!!」

突然の怒鳴り声に振り返ると、エクリアにそっくりの女性が立っていた。

「あちゃー、おかん来てしもたっ」

おかん……お母さんの事が……うんそっくりだ……

「エクリア……誰が喧嘩せえと言ったんや？」

「まっ、待つて下さいエレノアさん」

エレノアと呼ばれた女性の言葉を遮り、リデエアが必死に説明する

……

「此処やったら、埒外がアカン……全員来てもらおか？」

「はい……分かりました。」

「異存はありません」

「……」

(マコト、何でおかんに……)

(血の雨……回避)

なるほど、エレノアさんが早く来たのは、マコトの機転か……油断出来ないな……

リデエアSide

皆揃って、エレノアとお母さんとフェリオ兄さんの三人に叱られました。

アルフレッド君はボクの事を庇ってくれたけど……

「そいつ等が、リデエア達に絡んで来たんだ……」

「だからって……」

「もう、いいよ……」

ボクは耐え切れずにその場を飛び出した。

アルフレッドSide

「彼女は悪くない……そいつ等が、ちょっかいを出したんだ。」

「……………」

全く……………リディアを馬鹿にする前に、自分達の実力を理解しろ【井の中の蛙大海を知らず】だ。

「こいつ等の処分はともかく僕の処分は？」

騎士団からの追放なら、正直……………リディアを旅に誘ってみるか、彼女なら……………て、どうかしてるぞ 僕は……………

「アルフレッド君、君の処分は、一週間反省房入りと」

「掃除やね」

フェリオさんとエレノアさんが静かに告げる。

「分かりました、リディアは？」

「リディアの処分は、不問ね」

そうか……………良かった。

(何故リディアの事を心配してるんだ……………僕は?)

もやもやした気持ちのまま執務室を後にした。

リディア Side

アルフレッド君やリーザちゃん達の居る所で泣けない……私はお母さんの【力】を生まれる時に私が奪た……

「私なんか……」

「その先は言わない事。」

振り返るとアイリスさんが後ろに立っていた……

「アイリス……お……姉さん……」

不意にアイリスさんが私を抱きしめる。

「そうね……リディア……イリア（お母さん）の代わりだけど、今は思いつきり泣いて良いよ……」

「うっ、うあ〜ん！〜！」

私は堪え切れずに大泣きした……アイリスさん、暖かくて、お母さんみたいだった……ひとしきり泣きじゃくった後、アイリスさんが私に話しかける。

「さあ、皆心配してるよ。」

「は……い……」

やっぱり私は泣き虫だ……しじしと目を拭う、さあ、皆に謝りに

行く。

この後、皆にちゃんと謝った、アルフレッド君は一週間後、反省房から出て来た。

「あ、アルフレッド君／＼」

「／＼リデエア、ちょっと来い。」

アルフレッド君が私に手招きする、一体何だろ……？

彼が私の耳元で囁く。

「……全部一人で背負うな／＼」

「えっ？」

「じゃあな、後、僕とエクリアとマコトにリーザ、最後に君まで執務室に来いだって」

アルフレッド Side

執務室に入ると、何故かニコニコ顔のイリアさんと、笑いを堪えるフェリオさんにパーカーフェース決め込むエレノアさんが居た。

「???…何だ、この空気…誰か説明してくれ。」

「アルフレッド君一週間反省入りお疲れ様でした。」

「はい……」

「所で今度、新たに新部隊を結成する事が決まった。」

なるほど…そう言う事か。

「お断り致します。」

「まだ何も言つて無いが。」

どうせ、リデエア達を頼むとか、隊長にはリデエアを当てるとかだろっ?

「断る前に話しを聞きなさい。」

「コホン、さて説明するでまず、リデエアが隊長や無いアルフレッド、君がリーダーや副隊長はマコトや…リデエアはそそっかしいから、まず副隊長は向いとらん、エクリアは血の気が多過ぎや」

「なるほど、で何で僕何ですか?」

「以前、空中海賊とやりおつたやろ?」

また数ヶ月前の出来事を…皆さん侮れませんか

「あん時、アンタ、アイツ等とやり合った……違うか？」

「はい、その通りです。」

「海賊ソフィアに、君狙われとる……おもいつきしな。」

ソフィア……あの裏切り者か……迷惑だな……

「それで、君を保護すると言えば反発する、だからといって。」

放り出す訳には行かない、つくづく厄介だな……結局、向こうとやり合う事に為るなら、味方が多い方が僕の為だと押し切られた。

**アイリス教導官（後書き）**

次回頑張ります。

## 白狼騎士団（前書き）

主人公のアルフレッドの素直じゃない部分が引っ込み始めました。

誤字を修正しました。

## 白狼騎士団

白狼騎士団執務室

アルフレッドSide

あれから……まる一年か、月日が経つのは早いな……紅茶を飲みながら、これまでの出来を振り返る。

まずは旅に出た目的や出来事を振り返ろう。

1：イリアさんに会う為。

2：海賊の襲撃とリデエア達に出会う。

3：父の陰謀(?)で騎士団に入る。

4：リデエアがインネンを付けられた現場を目撃エクリアと共闘で振り返り。

5：反省房に入る無論アイツ等も同罪(笑)

6：アイツ等と和解……そして現在は僕達のメンバーか……ちなみに僕が隊長で副隊長はエクリアだ。

以上回想終わり。

ドアをノックする音が聞こえる。

「誰か？」

「アレックス・バーロンです、書類に目を通して頂きたいのですか。」

アレックスは一年前にリデアに絡んだ、リーダー格だった奴だ、アレックスは反省房入りした後リデアの事情を知って真つ先に謝りに来た、今では僕の補佐役に就いている。

「あれから、もう一年か……」

「はい、俺も馬鹿な事を仕出かしました。」

あの10人の内この隊に来たのは、アレックス・レイド・ランドルフの三人だけだ、他の奴らは別の部署に入った、そんな事は今はどうでもいいだろう。

「今はリデアが心配ですね……隊長もですか？」

「アレックスもそう思うか？」

最近リデアが訓練等で行き詰まってる様だ……少し荒療治になるが、僕の彼女達に出会う前の本当の目的……イリアさんと【戦う】のが僕の目的の一人だ……

「隊長？」

「少し……荒療治をするか……リーザやリデアは勿論、マコトにエクリア達は僕を軽蔑するかもね。」

「……まさか、リデエアを見捨てるお積りですか？」

アレックスの目が険しくなる……さて彼には話しておくか僕とリデエアの【因縁】を……

「場合によつては、そうなるね……僕も今は亡き父さんに対して焦っていた事があつたしね。」

リデエアはお母さんのイリアさんを超えたがっている……いや超えようと必死だ、彼女は今アリ地獄に墜ちたアリそのものだ、全くいきなり高い壁を選びやがって……僕もその【壁】の一人だろう。

(彼女の想い全部とは言わない……半分は背負ってやる……)

「本当に半分だけだからな……」

「何か言いましたか？」

「ノノノな、何でもない、そ、それより……頼まれてくれないか？」

アレックスにリデエアを訓練場に呼んで来るように頼むさて、リデエア……遠慮はしない全力で行くぞ。

リデエアSide

いきなりアルフレッド君から、訓練場に来てほしいと連絡があつた、

アレックス君の様子から何か大事な事何だと解る。

「アルフレッドく……いえ隊長遅くなりました。」

少しアルフレッド君がイラついている……ボクのミスのせいだろうか？

「リディア……少し焦りすぎだな……僕が君の最初の壁になってやる……」

「えっ……ど、どう言う事？」

アルフレッド君がボクの壁に……少し頭が混乱する……

「フッ……詰まり君は、高望みし過ぎだよ！」

いきなりアルフレッド君が、剣を抜き放ち襲い掛って来る、ボクも剣を抜いて彼の攻撃を防ぐ。

「ボクが高望みし過ぎだって？」

「だって、早く超えたいんだろ？イリアさんを。」

！……どうして……知ってるの？誰にもまだ話していないのに……

「解らないか？僕も君も似た者同士だからさ。」

アルフレッド君とボクが似ている……？

「僕は父さんが勝って無かったイリアさんと【戦い】たかった……」

「！！……お母さんど？」

「そうさ……けど、リデエア君はイリアさんから【力】を奪ったと思っ込んでる。」

奪ったと思っ込んでる……その一言に頭が真っ白になって何かが弾ける。

「こんな力！奪いたくて、奪ったんじゃあないよっ！！」

打ち込む剣に力が入る、しかしアルフレッド君に掠りもしない……

「そう、君は優しい過ぎるんだ、だから余計に腹が立つだよ！」

「何で！何でだよ！」

アルフレッド君の繰り出す一撃が何時もより重く感じる……

「君は、内心怯えている……」

「アルフレッド君！言って良い事と悪い事があるよっ」

ボク達は気が付けば本気で切り合いをしていた……止める者は誰も居ない。

アルフレッドSide

泣き声も上げれば、可愛い奴だけど……全くそんな様子も見せない、頑張り過ぎだよ……君は……

「腹が立つか？なら全力で来るんだ【壁】にね」

「ば、馬鹿にして……うああっ！」

がむしゃらに剣を振り回すリディア……さすがにこれ以上は彼女が限界だろう……この馬鹿げた茶番も終わりにしよう。

「ボクは……こんな力なんて……要らなかった……」

「ああ……」

「ボク……が……お母さんを……が無理をする原因になった……」

「一人で、頑張って来たんだね……」

「ボ……ク……が……いなければ……」

「なら……僕が君を支えてやる、絶対だ。」

もう……彼女に剣を振り回すだけの勢いは無い、泣き出す手前だ。

「ホント……に？」

「生憎、嘘は付くなって父さんに教えられてきたんだ。」

そつと、ディアナを抱きしめる……全く一人で全部抱え込もうとするからパンクするんだ。

リデエアが僕の胸に顔を埋める、肩がかすかに震えている。

「これ……じゃあ……訓練にならないよ……」

「別に構わないさ、それよりもう落ち着いたか？ディアナ」

「うん、／＼／＼ありがとうアルフレッド君」

アルフレッドSide

翌朝、他の連中の特に男達の視線が鋭い物に変わっていた。

後エクリア・リーザの視線もきつかったな……

まあ……思い当たる事はアレックスが嘘八百並べたな……

(アレックス、いつか仕返ししてやるっ)

と心に誓った僕が居た。

## 白狼騎士団（後書き）

もう少しアルフレッドの素直じゃない部分を引っ張りたかったです。

次回頑張ります。

**似た者同士（前書き）**

似た者同士のタイトル通りの表現になる様に頑張りました。

誤字を修正しました。

## 似た者同士

アルフレッドSide

最近鋭い視線を感じる……特に男達の視線が鋭いそう……まるで剣先の様だ。

(遠巻きから睨みつけやがって……僕はお前達を襲う肉食動物か？それと女子達も……皆僕が君達に何時怨みを買った？何時僕が喧嘩を売ったの？誰か教えて。)

しかも僕は耳はエルフ並何だよね〜良く聞こえるんだよ『アルフレッドのバカヤロー！よくも俺達のリディアちゃんを毒牙に掛けやがってーっ！』や『リディアさんがアルフレッド君と付き合い始めたですって！？』等勘違いや憎悪が入り混じってる……

(近い内に哨戒任務があるから助かった……)

リディアSide

今日は皆の様子がおかしい……昨日のアルフレッド君との訓練が変な誤解を生んだらしい……

(アレックスがまたホラを吹いたのかな？たまに彼、ほら吹きにク  
ラスチェンジするし……)

ぼんやりと考え込んでいたら、誰かとぶつかってお互いにこける。

「痛……危ないだろう！」

「じ、ごめんなさいっ」

相手の顔を確認したら……アルフレッド君だった……何で？こんな  
時にアルフレッドが???

「ほら／／／／掴まって」

「／／／／えっ、うん……ありがとう／／／／」

差し出された手を掴み起き上がる。

そ、そうだ……哨戒任務の話がまだだった。

「えっと……／／／」

「あの……／／／」

とお互いに声が重なり上手く会話に為らない。

「お二人さん見せ付けるんなら他所にいき」

「リディア、まあ、気持ちは分からなくは無いけど」

「え、エクリア!」

「／／／／リーザちゃん!？」

エクリアSide

全く……もう少し人目の着かん所でバカップルになってや。

「コホン、じゃあミーティングしてまおか？」

「ああ、わかった」

「／／／／はい」

「やれやれ」

リーザとうちは呆れ顔で会議室に向かう、二人は後からついて来る、アルフレッドあんた隊長の自覚あんの？

(まあ、アルフレッドの実力は一年前と比べてマシになつとるから大丈夫やる)

会議室は、アレックスを含む三人組とうち等が集まる。

「隊長、今回の哨戒任務の担当空域は何処になりますか？」

全員が席に着いてからレイドが尋ねる、ランドルフは黙ってこちらを伺う。

「今回は北東第204エリアだな」

北東第204エリア……か、正直ザコイ海賊しかおらんな、しかし隊長は険しい顔になつとる。

「海賊ソフィアが現れた……らしい」

海賊ソフィア！？おかんが散々てこずつた、陰険性悪女か……

「この一年間出没の報告回数が増えるそつだ」

ランドルフが半ば呆れ顔で報告書を読む。

「しかし元騎士だかなり手強いぞ……僕は一年前に彼女と対峙した事がある」

「隊長と……ですか？」

「ああ……」

全員が緊張した、アルフレッド隊長とやり合つて逃げおおせた相手……か

「哨戒任務は今から五日後だ、皆今回は何時もよりも気を引き締めて掛かれ……以上解散」

「はい！」「」

全員が部屋を出ていく。

「隊長、ちょっとかまへん？」

「良いよ、時間なら有る」

隊長を呼び止めると素直に応じてくれた。

「隊長、ズバリ聞くでリデエアをどう、思ってる？」

「……好きだ」

真顔で、うちの問いに答える。

「そっかぁ……して本人には告白やった？」

「／／／機会があればな。」

「あかん……早う本心伝えやな」

「エクリア……しばらく時間をくれ一人で考えたい」

「リデエアを泣かしたら……そんな時は」

「覚悟してるぞ」

\*\*\*

リーザSide

リデエアを呼び止める、アルフレッド君の事らしい。

「アルフレッド君の事をリデエア好きなの？」

「／／／／／／／／」

顔が熱くなる……言われなくても……解ってる癖にリーザの意地悪。

「リデエア……感情丸出しだよ……」

「／／／／意地悪……」

むくれたリデエアをなだめて彼女に本心を聞く。

「勿論好きだけど……アルフレッド君の立場もあるし……」

「じゃあ……このまま？それとも……」

「時間があれば、アルフレッド君に言うね……」

やっぱり似た者同士だ……

\*\*\*

アルフレッドSide

たつく……哨戒任務まで後三日、早く出港したい。

これまでの二日間を振り返る。

1 アルフレッド & amp ; リディア親衛隊の怨みを二人で気付かない内に買ったらしい。

2 アレックス以外の奴がフォーカスしゃがった。

3 エクリアに態度をはっきりと決めると言われた。

4 哨戒任務が待ち遠しい

まあ、哨戒任務が終わればデートに誘ってみるか……

しかし一番の問題は……フェリオさんだ……フェリオさん……最近恐いんだ……

『アルフレッド君……リディアの気持ちを解ってくれてるかな？  
もしリディアを泣かしたら……僕が君を泣かすからね』

その内に何かの間違いでフェリオさんが魔獣モードで追い掛けて来そうだ……だから今は執務室に布団一式と寝巻を持ち込んで、此処のところイリアさんの自宅に帰っていない。

上手く誤魔化してるけど……一騒動落ち着いたらリディアに謝る……

…

似た者同士（後書き）

次回頑張ります。

## アルフレッド負傷（前書き）

今回は話しが少なくてすみません。

次回長くするように頑張ります。

## アルフレッド負傷

空中警備艦「ガラム」

アルフレッド Side

今僕達は海賊の警戒に当たっている、海賊ソフィアが荒らし回って被害は今月で100件の内50件はその騒ぎに便乗した海賊達だ、こんな事になると分かっていたら、あの時捕まえておけば良かった……後悔先に立たずだな。

「隊長、何か？」

「いや、アレックス何でも無いよ」

そんな、やり取りをしていた時、緊急通信が入る、どうやら……お出ましのようだ。

「総員、直ちに戦闘配置に着け」

「さあ、歓迎のご挨拶だなっ」

しばらくして砲撃準備完了の報告が入る、今回は逃がさない、絶対に。

ソフィアSide

「リーダー、後ろに船が接近中ですぜ」  
たつく、相変わらず真面目な連中だね……

「まあ、派手に歓迎してやんなっ」

「了解でさあ、後部砲頭回せっ」

半球式の砲が目標に狙いを定める……後は撃つだけ、しかし向こうが早く撃ってきた。

砲弾が命中し速度が落ちる。

《機関室より、報告っ、機関部損傷》

「やってくれたねっ、お礼を贈りなっ」

「後ろの船にぶっ放せっ」

連続で、三発見舞う、だが回避されたが、一発が命中した、しかし臆する事無くこちらに突っ込んで来る。

「コイツ等、気は確かかっ！」

「何やってる！白兵戦の準備急ぎなっ！！」

このボロ船もそろそろ棄て時だね……

アルフレッドSide

船体脇腹に一発、喰らったが戦闘に問題は無い、それに今がチャンスだろう、あんな暴れ虎を逃がせば、かえって危険だ。

「本艦の被害は？」

「左舷に被弾しかし損害は軽微です、装甲を少しもって、いかれた程度です」

「海賊に追いつき次第白兵戦に突入するのは、どうかな？」

「ええっ！フェリオ隊を待たないんですか？」

それぞれ不安や又は不満げな顔をする、僕だってフェリオ隊が居ればこんな無茶はしない。

「……フェリオ隊の他はどの隊が近い？」

「は、はい、ルナ隊ともう一つは共和国軍です」

共和国軍か、旧ヴァルゼリアの国防軍だな……よし追い込むか？

アレックスとレイドにクラウドスが意見を提案してくる。

「まず、このままの距離を保ちながらアイツ等を追い込むのはどう

ですか？」

「しかし、こちらにも、そんなに待てないぜ、アレックス」

「私は無理矢理白兵戦は反対です、白兵戦は奴等の十八番です」

確かに、待ち伏せと白兵戦はアイツ等の十八番だ、さて……どうしたものか……

その時、オペレーターが悲鳴に近い大声で報告する。

「「て、敵がこちらに発砲っ、直撃コースです！」」

「総員、衝撃にそなえろ！」

凄まじい衝撃とが船体を襲う、ブリッジ内が暗くなる……

「本艦、ブリッジ周辺に被弾っ、しかし火災はありませんでした。」

ふう、リディアとリーザが居なくて良かった……もしあの二人に何か有ったら、自分を絶対に許せなくなる……

「ふう、ヤバかったですね隊長」

「そうだね、フェリオさんに殺されるかもね」

そんなやり取りをしていたら、クラウドに『真面目にお願いします』と叱られた。

海賊達は速度を下げ始めた、どうやら向こうは決着を付けたいらし

い、望む所だ。

「よし、海賊船に乗り込むぞ！」

「了解！！」

フェリオ隊が、来るまでに終わらせられたら、それに越した事は無いな。

リデエアSide

ふう、参ったな……風邪を引くなんて、昨日はほとんど寝込んでいた、しかも、アルフレッド君がお見舞いに来てくれたのに、うつしたら悪いから会わなかった。

(…………嫌な予感がする)

ドアをノックする音が聞こえた。

『リデエア、入っても良いか？』

「アルト父さん！うん、入っていいよ……ゴホゴホ」

父さんが入って来る、顔は呆れていた。

「おいおい、そんな大声で驚く事か？」

でも、何で父さんがこんな所にいるんだろ……

そんな疑問が顔に出たのだろ、笑いながら父さんが答える。

「娘のお前や、イリアが倒れたら、見舞いに必ず来るさ」

／＼。真顔で言うなーっ、少しは笑ったり、おどけて言う台詞だよそれっ。

この人は、何時もそうだボクや母さん、フェリオ兄さんが少しでも病気なんかになったら、心配して仕事をほったらかしてやって来る。

父さんが、ボクに話し掛けようとした時、リーザが部屋に飛び込んで来る！

「っり、リデエアっ、た、大変よっ、アルフレッド隊長が負傷したって！」

リーザはボクの看病の為に残ってくれていた。

「ア、アルフレッド君がっ、み、皆は？」

「リデエア、落ち着くんだ、お前が慌ててもどうしようも無い」

父さんがボクをなだめる。

「海賊船が、白兵戦を仕掛けて来て、アレックスを庇った隊長が負傷したって」

「リーザ君、アルフレッド君の怪我は？」

「アルトさん、はい、怪我は肩を軽く切られた程度で済んだそうです」

肩を怪我したって……ボクなんかじゃ怪我なんてしなかった癖につ

「う、……っ、くっう」

頭に暖かい手が被さる、アルト父さんの手だった。

「騎士に、なった娘が泣いては行けないよ、リデエア、それより海賊はソフィアだね？リーザ」

「そう、みたいですアルトさん……」

その時の父さんの顔は、少し恐かった。

「全く……彼女はまだ懲りて無いですね……僕も現場復帰は無理ですが……ある人に協力を求めますか」

ある人って、誰だろ？なんだか、物凄く嫌な予感がする。

## アルフレッド負傷（後書き）

次回頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7299w/>

---

父の遺志を継ぐ少年

2011年11月21日21時42分発行